

グッドデザイン賞の受賞から 視えてくるもの

喜んではいられない現状

2011年度は8件、2012年度は6件、そして2013年度は14件に。秋田県のグッドデザイン(公益財団法人日本デザイン振興会主催)の受賞件数である。2013年度は過去最多。以前の十数年間には年度の受賞件数が0~2、3件であるのに比べ大幅に増加した。

この変化が秋田県におけるデザインの状況を反映しているとすれば喜ばしいことであるが、厳しい見方をすれば、この3年間に限った一過性のものとも考えられる。

受賞数の増加には二つの背景がある。

最大の要因は、震災復興支援の特別措置である。グッドデザインの応募には費用がかかる。申請に1万円、2次審査に6万円、受賞した際には展示や年鑑掲載、マークの年間使用料まで含めると20万円前後の費用が発生する(2013年度)。中小企業にとっては、費用対効果の面で敷居は高い。日本デザイン振興会は、2011年の震災復興支

援として東北6県及び茨城県の応募者に対しては3年間(2013年度まで)無料という応募環境を用意した。県のこれまでの受賞企業は大半が伝統工芸関連であり、企業規模は小さい。従って、その費用負担を考えると過去の受賞件数の少なさは当然のように思える。

受賞数増加の二つ目の要因は、あきた産業デザイン支援センターによるサポートである。あきた産業デザイン支援センターは2011年に開設された。それまで受賞件数のふるわなかった理由の一つに、応募書類の作成に際し、自社製品の説明に不慣れな企業環境がある。同センターは、グッドデザイン賞の県内産業への訴求効果を考え、震災復興支援の特別措置の利用促進とこれを利用したいと考える企業の書類作成、相談支援などを積極的に行ったのである。

以上の、二つが2011年度に同時に始まったのである。

あきた産業デザイン支援センターの設置

1998年度に公的機関として秋田県工業技術センター(当時)内にあったデザイン支援部門が機構改革により廃止され、長らく支援・相談窓口が無い状態が続いていた。

2010年、県はこの流れを方向転換し、「あきた伝統的工芸品等振興プラン」を策定、翌2011年4月にこれを実施した。このプランの中心的な事業の一つが、『あきた産業デザイン支援センター』の設置であった。

産業デザイン実態調査の実施から 見えてくるもの

先に述べた、受賞数の増加が一過性のものではないかとの危惧は上記の震災復興支援措置の終了に加え、2012年に県が実施した「秋田県産業デザイン実態調査」の結果から生じるものである。県内の製造業、デザイン業などに対し、企業活動でのデザイン導入の状況を把握するために実施したアンケート調査である。(製造業440社、デザイン業140社、回収率31%)

ここで見てきたものは「デザインが企業の活力になり得ていない」という現実である。デザイン活用によるモノづくりの将来展望や今後のグッドデザインの受賞に結びつくような要因がなかなか見えてこないからである。

一体、秋田県の産業や企業活動におけるデザインの状況はどうか?経営にデザインを活用している企業はどれだけあるのだろうか?

現状からいえば、その数は機械などの製造業に比べ、危機感を抱き、デザインの有効性を実感している一部の伝統工芸品関連企業などの方が多い。それは、グッドデザイン受賞履歴からも明らかである。

今後への期待

では、今後はどうであろうか?前向きに考えたとき、今年の受賞内容にいくつかのヒントがある様に思う。

一つには、受賞企業の業種の多用化である。製品においては未だに木製品が多いが、受賞の常連といえる企業に加え新たな企業が、あるいは新たな業種が加わったことが挙げられる。特に、2013年度はこれが顕著であった。

ついで、経営者自らがデザイン導入に積極的であった事実がある。しかも、若い経営者達の多くは、デザイナーを使ったのではなく、自らが行動している。デザインの思考、デザインのマインドを持ち合わせている。



新たな業種のグッドデザイン受賞企業も増えている

これらは、デザインを企業経営の中で活用しようとする産業デザインの考え方、方向性と合致するといえよう。

グッドデザインの受賞が、県のデザインの状況を反映するものではないと最初に述べたが、今後向かうべき秋田県のデザインの方向を示唆するものと期待する。そして、私の危惧が徒労に終わることを願うものである。



秋田公立美術大学 社会貢献センター 教授

五十嵐 潤
Igarashi Jun

【研究分野】

プロダクトデザイン、デザインコンサルティング、
地場産業へのデザイン導入戦略、地場製品の開発支援

【略歴】

千葉県出身
1975年 九州芸術工科大学芸術工学部(現九州大学芸術工学部)
工業設計学科(機器設計専攻)卒業
1981年 東京芸術大学大学院美術研究科(機器デザイン専攻)修了

リハビリテーション機器メーカーにて医療・福祉機器の開発担当の後、フリーランスに。2001年より秋田公立美術工芸短期大学教授。プロダクトデザイン、デザインコンサルティングを専門に、地場産業へのデザイン導入戦略、地場製品の開発支援にも積極的に取組む。



秋田のグッドデザイン賞展(G展)